

《北京便り》 公開面接でつかむ

有名企業への就職チャンス！

先日、中国に来たばかりの日本人が「中国はテレビのチャンネル数が多いですね！」と驚いているのを耳にしました。中国は、国営放送だけで20チャンネルほど、各省や市にもテレビ局があり、独自のチャンネルを持っているため、合わせると70～80チャンネルはありそうです。ここまで多いと、どのチャンネルで何の番組を放送しているのか把握するのが大変です。

そんな数あるテレビ番組のなか、大学生をはじめとする20代前半から30代の若者の間で人気を博する番組があります。今からちょうど2年前の2010年12月に放送を開始した、江蘇テレビ局と中国教育テレビ局が共同制作する『職来職往』という番組です。

この番組を一言で説明するなら、「公開面接」です。週2回、毎週木曜日と金曜日の夜に放送しています。各回4～5人の一般求職

者が登場し、有名企業100社への就職面接に挑みます。スタジオには100社を代表して18社から18名の面接官が求職者を待ち受けます。求職者は一人ずつ登場し、自己紹介、希望職種、希望給与額を伝え、いよいよ面接スタートです。

面接官である18名は、番組内で「達人」と呼ばれています。マスコミ、メーカー、IT、広告、美容、法律事務所など、さまざまな業界の企業戦士が集まっています。質疑応答しながら、「達人」が求職者を気に入らなければ手元のランプを消していき、最終段階でランプが灯っていて、且つ求職者との条件が合致すれば就職成功。18名の「達人」のランプがすべて消えてしまえば失敗。点灯ランプの数に応じて、スタジオにいる18社以外の企業を選択することもできます。これが番組の大まかなルールです。しかし、番組放送開始後約1年でこのルールは変更になりました。ランプが逆になったのです。現在はランプが消えている状態から面接がスタートし、求職者を気に入ればランプを点けるという方法になりました。欠点を見つけてランプを消すという消極的な方法だったのが、長所を見つけてランプを点けるという積極的な方法に変わったのです。視聴者の視点で言えば、前者の方が断然面白いものでした。なぜなら、「達人」が求職者をこてんぱんに貶していくからです。「君は経験も能力もないのに、希望給与が高すぎるね」と言っただけでランプを消し「君にこの仕事は合わないよ」と言っただけでランプを消し……。 「君、来る場所を間違ってるよ」と、番組出演自体を否定するとい



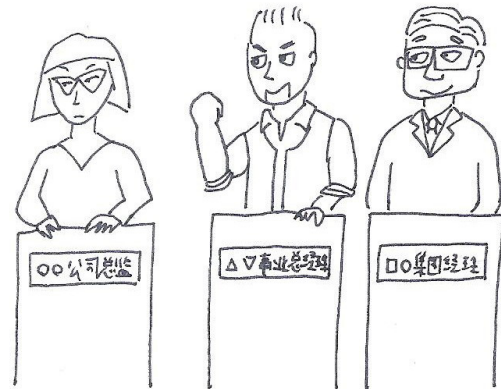
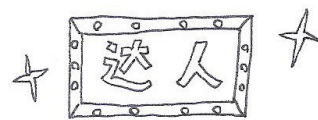
う厳しいコメントが飛び出したこともありました。求職者はよく耐えていられるなあと感心し、また厳しい社会だなあと他人事のように見ている視聴者は多かったと思います。「達人」の厳しい言葉に、毎回必ず誰か一人は、求職者が泣いているという状況でした。これが問題だったのか分かりませんが、番組のルールは視聴者にとって面白くない方向に変更されました。それでも、まだ今のところ番組の人気は保たれています。

この番組がヒットした要因を私なりに分析してみると、以下3点が挙げられます。

一、就職難であるこの時代に就業チャンスを与えていること。90年代後半から、中国は教育制度改革が行われ、大学進学率は急激に上昇しました。高等教育を受ける人が増えたのは喜ばしいことですが、これは雇用における買い手市場をもたらし、大学を卒業した優秀な若者がなかなか希望の職に就けないという状況を生み出してしまったのです。

二、求職側と求人側の両視点から番組を鑑賞することができること。「達人」は、求職者に簡単な問題を出し、求職者の判断力や応答内容をチェックしますが、その出題にはどのような意図があったのか、そして求職者の回答はなぜいけなかったのか等を解説してくれます。また、「達人」同士で異なる見解が持たれる場合もあります。有名企業がどのような点に着目して人材確保しているのかを参考にし、自社に役立てている人事担当者もいることでしょう。

三、「達人」が个性的であること。「達人」と呼ばれる面接官は出演時のいでたちもお洒落で、一部は芸能人化し、この番組以外にもメディア露出しています。一昔前のライブドア広報担当のようなものでしょうか。彼らは一企業マンでありながら、ブログやツイッターには100万人を超えるフォロワーを持ち、本を出せばサイン会を行うなど、いい広告塔となっています。



番組内で見事採用が決まると、数ヵ月後に追跡取材があり、イキイキと働く元求職者の姿が映し出されます。若者に活気があると、社会もパッと明るくなるような気がし、見ていてとても清々しいです。

面接というものは、ただでさえ緊張するというのに、ましてやスタジオには多くの観客や番組スタッフが、そしてそれが中国全土で放送されるわけですから、一般出演者はよほどの覚悟と勇気が必要かと思います。それでも、それと引き換えに有名企業で働けるかもしれないという希望を抱き、求職者はやって来ます。もし、読者の皆さんが求職中なら、テレビでの公開面接を受けてみたいと思われませんか。

(イラスト：ごんごんた)

筆者紹介

呉 京順 (Jingshun Wu)

中国専利代理人。GIP China Corporation 総経理。
北京師範大学卒業。メーカー、中国専利代理事務所で業務経験を積み、2007年よりグローバル・アイビー東京特許業務法人にて研修。2009年GIPグループの北京オフィスとなるGIP China Corporationを創設。主に、日本・韓国企業の中国特許・商標出願、権利化業務を担当。中日韓の三ヶ国語が堪能。中日韓文化に興味を持つ。